

## 論文内容の要旨

報告番号		氏名	原田 泉美
当院のリワークプログラム参加者における復職に関連する因子の検討			

### 論文内容の要旨

日本では1990年代から精神科のクリニックや病院で、精神疾患によって長期の休職に至った患者のためのリワークプログラムが盛んとなった。2015年から奈良県立医科大学附属病院でもリワークプログラムを開始し、現在は週に1.5日、12週間を1クールとして実施している。今回当院リワークプログラムに2015年7月1日から2019年9月30日までの間に参加した患者において、職場への復帰に関する因子について後方視的に検討を行った。この期間中の利用者の実数は49人、平均年齢は37.3歳、男性が38人、女性が11人であった。最も多い疾患はうつ病で31人、次いで双極性障害が8人、適応障害が3人であった。リワークプログラム終了後6か月以内に復職を達成した25名を復職群とし、残り24名を非復職群とした。

プログラム開始時点では、人口統計学的特徴や職業的特徴、臨床的特徴について復職群と非復職群で統計学的な違いは認めなかった。プログラム開始時のHAM-D(ハミルトンうつ病評価尺度)および復職準備性評価シートのスコアに有意な差を認めたため、性別、年齢、HAM-Dと復職準備性評価シートのスコアを交絡因子と仮定して、傾向スコアマッチングを用いた解析を行った。プログラム終了時のHAM-Dのスコアは復職群と非復職群で有意な差を認めなかった。復職準備性評価シートのうち身だしなみと職場の犠牲になって発症したというトラウマ感情、業務への関心・理解の3項目において両群で有意な違いを認めた。また標準化リワークプログラム評価シートのうち自ら話しかけられるかといった会話と主観的うつ病体験の客観的受け止めの2項目において両群で有意な違いを認めた。これらの項目の改善が早期の職場への復帰につながる可能性が示唆された。

本研究の限界点は、サンプルサイズが小さいこと、対照群がなくプログラムの効果について評価ができないことである。また復職したかどうかをアウトカムと設定しており、再休職したかどうかの調査はできていない。今後さらに症例数を増やし、長期の調査を行うことで、疾患による違いや就労継続日数などをアウトカムとして再休職まで評価できるようにしていきたい。また、今回の研究で復職群と非復職群で違いを認めた評価項目について積極的に介入することで、これらの項目の改善が復職率を高められるかについて今後の研究課題としたい。